

澄み切つた大空の様に清涼な、月の様に圓滿な心は讀書の中からの獲物であつた、總ての誘惑を打拂ふ銅鐵の様な強く堅い心は嚴格な繼母からの尊い賜であつた、九時を告げる標子木の響きに驚かされて書物が軽く閉されたとき彼の女が唇頭に洩らした微笑は悲しみを喜びに轉換し、苦痛を安樂に開會する御祖師様の御教へに知らずくの間には培はれた小百合の花のみ法の露に潤ひたるほんこに麗しいをして充たされた喜びの表情であつた。



## 夢

重 松 ひ さ し

日向りの悪い陰鬱そうな六疊間もその中央に一つの火鉢が置いてある炭火が眞赤に熾熱つてかけてある鐵瓶からは濃々と白い湯気が吐かれてゐる。上段の床の間には聖者日蓮の眞筆の寫しで此の寺の什寶だと思はれてゐる、十界の曼荼羅が懸けてある、それが光線の工合でか、いかにも古めしく、ほん物だと思わせるには充分である。

「正壽お前は佛祖の御恩を知らぬ奴だ、ようもそんな大口が言へるワイ」  
こう云ふのは火鉢の前に圍の大きな厚綿の座蒲團の上に、キッチンと尻を据へた師尙の稍々怒氣を含んだ銅羅聲である。

「お師尙さま佛様の御恩を深く思へばこそ申すので御座います、お怒りなさいますけれど事實が證明して

ゐるじやありませんか」

こう相應へるのは現在宗門の學林に籍を置いてある弟子の正壽である、どこぞに純な青年らしい血色があつて前途に輝く希望の歡喜微笑があり／＼と眉宇の間に現れてゐるのが見へる。

師尙の語調が平常と異つて、なんとなく荒々しいところから押しても今こゝに師尙と弟子とが一室に對座して、なにをしてゐるか、略々想像するに難くはない、なんとなく、いやに室の空氣が緊縮してゐるやうな氣がする。

「一體お前はそう云ふからには還俗でもする氣なのだらう……………フウン太い事言つて今に現罰が當るワイ……………」

昂奮の感情を無理にも押へ付けて、それが一種の侮蔑に變つたことが領かれる。

「お師尙さま、そんなら、あなたは、殿堂の中に因襲と姑息を把持して心からもない、囁言を云つて信徒を籠絡し、それが佛祖に對する報恩じや」

どお仰言るのですか、こう強く答へ切つた後尾がなんとなく涙に包まれてゐた、たゞでさい逆上し易い青年正壽の心の中には、今言ひ知れない恐怖と返逆の二つがムラ／＼と湧いて、さき程まで、ちやんと膝の上に行儀よく重ねてあつた、兩手が、いつの間にか無意識にシツカリと固く握り締められてゐた。

「云はして置けば、なんどでも吐くのかい、僧侶が葬式や法事をやる事がナゼ悪い」

「高い學費を貢いでワシはお前からそんな理屈を聞かうとは思はぬワイ、この不知恩奴!!」

絶望的な言葉でありながら、而もどこまでも威壓的なアクセント交りのこの語調が今師尙の口から洩れ出たのである、正壽は再び應へる勇氣が出なかつた黙つて下向たまゝ考へこんだ、暫時二人の間には沈黙が續いた、まるで敵同志が合ひ對陣するかのやうに……………。

「オイ」と沈黙を破つた恐ろしい聲が放たれたかと思ふと、

「正壽ナゼ貴様は黙つてゐる、それほごまでに現在の、この寺院生活が價値のないものならば——それは

ごまでに僧侶が罪惡なものならば——

お前がそれほごまでに此の生活を、あきたらなく思ふならばお前には、もうワシも思ひを掛けぬから勝手にするがよい」

と投げ出された、その刹那正壽は万鈞の重みを一時に受けた氣がして涙に泌み、と咽ばすには居られな

い。

「ではお師尙さま許して下さい、私は私の欲する道に進みますから」

こう云つて六疊の間を退いて自分の部屋へとかへり、日頃愛讀せる「トルストイの我が宗教」をモスリンの風呂敷に包んで、着のみ着のまゝで寺を出た。今更のやうに、熱い涙が兩頬を濕した、なんだ、あんな惡魔の殿堂因襲の巢窟、教杆の住家、あれに未練が、あつて堪まるかい、ありごあらゆる、こうした言句を思ひ出せるだけ記憶から呼び起して見た、そして行くのだい路歌へ………涙を流すまいと、無理に力強く返逆の焰を燃しては、見るもの、「去らば」と思へば、張りつめた心が歪んで恩義に絡まる熱い涙が女々しと云ふほごまでに瀧の如くに、ごめごもなく流れ落ちた。

「正壽く」と、ごこそで呼ぶ聲がする、ハツと思つて涙をふいたとき眠が醒めた。

あゝ今のは夢だのか——夢？ 夢！

それにしてもあまりに、はつきりとした夢だつた、

あたりポカンとして眺めたとき枕頭には、半分讀みなしの「法城を護る人々」が開かれて、十燭の電燈が皎々として一つの嘲笑と何等かの不吉を暗示でもするかの如くに、自分の顔を照してゐた。

——(をばり)——